

# 教皇フランシスコの広がる世界

乗 浩子

## 教皇の訪日 —長崎と広島へ

2019年11月末、ローマ教皇フランシスコは日本を訪問した。訪日の目的は2つあり、唯一の被爆国を訪れて反核・平和のメッセージを世界に発信することと、キリシタン弾圧によって殉教した人々を追悼することだった。

歴代の教皇の中でもピオ12世は第二次大戦中の原爆開発に警鐘を鳴らし、カトリック世界の現代化をめざした教皇ヨハネ23世は1962年のキューバ・ミサイル危機の際、直接フルシチョフソヴィエト連邦共産党書記長に呼びかけて危機を回避している。また教皇として1981年に初めて訪日したヨハネ・パウロ2世は広島を訪れ、国際法による核兵器禁止を訴えた。バチカン（ローマ教皇庁）は2017年9月に国連で核兵器禁止条約の署名・批准手続きが始まると、いち早く批准した。しかし核保有国の米国・ロシアなどに加え、被爆国日本も米国の核の傘のもとにあるとしてこれに反対。他方、条約の実現に尽くしたメキシコなどラテンアメリカ諸国は、キューバ・ミサイル危機の教訓から人間が住む地域では最初の非

核地帯条約である中南米核兵器禁止条約（トラテロルコ条約）を締結している（1968年）。

長崎市の爆心地公園を訪れた教皇は「この町は核兵器が悲惨な結末をもたらすことの証人です」と反核を訴えた。被爆直後の長崎で米国の従軍カメラマンが写した「焼き場に立つ少年」の写真に心を動かされた教皇は、写真をカードにして関係者に配布している。次いで16世紀のキリシタン弾圧で処刑された「日本26聖人」の記念碑がある西坂公園を訪れ、殉教者たちを悼んだ。広島では平和記念公園で被爆者たちの体験談に耳を傾け、「平和の巡礼者として被爆地を訪れる義務を感じていた」と述べ、核廃絶に向けて“¡Nunca Más!”とスペイン語で4度繰り返した。東京で東日本大震災の被害者との集まりに出席した教皇は、復興に向けた連帯をたたえる一方、日本カトリック司教協議会が原発廃止を求めていることにふれ、慎重さを訴えた。バチカンは核の平和利用に賛同し、原子力の平和利用を管理するIAEA（国際原子力機構）の正式メンバーである。IAEAの事務局長をつとめ、昨年他界した天野之弥氏の業績を教皇は高く評価している。



焼き場に立つ少年（バチカン提供）

## 移民の子 —教皇になるまで

1936年12月17日、のちに教皇となるホルヘ・マリオ・ベルゴリオは、イタリア移民の子としてアルゼンチンのブエノスアイレスで生まれた。サッカーに熱中し、タンゴを踊り、アルゼンチンの文豪ルイス・ボルヘスの作品を好み、台所にも立つ活発な少年だった。小学校卒業後、午前中は父が勤めていた工場で働き、午後は実業学校に通い、次いで食品衛生研究所などで働く。この間、働くことの大切さと楽しさを実感した。ブエノスアイレス大学で化学を専攻するが、聖職者になる堅い決意のもと、男子修道会のイエズス会に入会（1958年）。イエズス会が宣教活動に力を入れていたことも魅力で、ザビエルなど著名なイエズス会士が活躍し、戦後廃墟の中からめざましく復興した日本に行くことを彼は希望したが、

入会直前に患った肺の病を理由に拒まれた。1960年に清貧・貞潔・従順の請願を行って、イエズス会士（司祭）となる。その前年、フィデル・カストロやアルゼンチンのチェ・ゲバラらが起したキューバ革命は、西半球の冷戦体制を揺るがすことになった。1965年にイエズス会総長（～83年まで）に選出されたペドロ・アルペはスペイン出身の医師で、第二次大戦中に広島に修練院院長をつとめ、原爆投下直後に数多くの被爆者の治療に当たった。

キューバ革命後のラテンアメリカでは、反革命としての軍事クーデターが相次ぐ（ブラジルで1964年、アルゼンチン1962年および76年、チリ73年）。1974年末からローマでイエズス会第32回総会が開かれ、熾烈な論争の末、解放の神学路線が採択された。しかしバチカンなどの保守派はこれに抵抗、当時イエズス会アルゼンチン管区長の地位にあったベルゴリオは困難な対応に迫られた。アルゼンチン司教団の多くは軍政を支持したが、彼は軍に追われるイエズス会士を神学院にかくまい、秘かに国外に脱出させた。フォークランド戦争（1982年）に敗れた軍は政治の舞台から撤退した。彼はドイツで博士論文の準備を行い、帰国後92年に補佐司教、次いで大司教を経て枢機卿を兼ねることになる（2001年）。

### 教皇とラテンアメリカ

2013年3月13日、ブエノスアイレス枢機卿のベルゴリオは第266代ローマ教皇に選出された。ヨーロッパ以外からは1282年ぶり、しかも初めてのイエズス会出身の教皇である。エキュメニズム（キリスト教諸派の再一致および全世界的神学）を志向する教皇フランシスコは、就任以来中東・アフリカ・アジアなどの国々を訪れ、イスラム教徒や仏教徒など

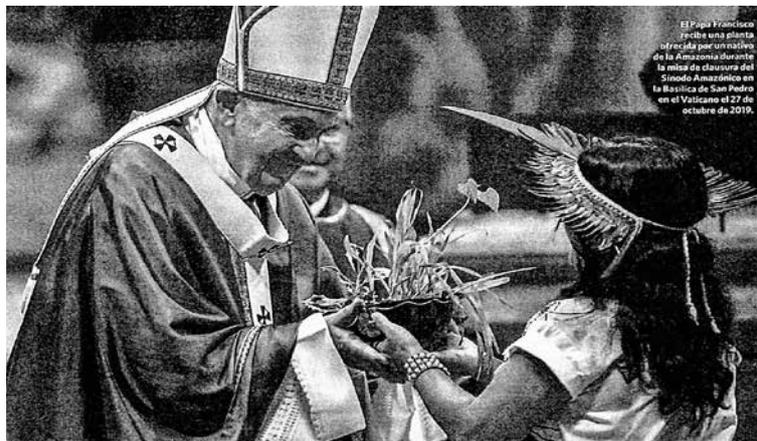
とも交流してきたが、以下ではとくに教皇の出身大陸ラテンアメリカへの働きかけに注目したい。

就任後最初に訪れたブラジルの W Y D <sup>ワールド・ユース・デイ</sup> リオデジャネイロ大会（2013年7月）で若者に呼びかけた教皇は、2015年7月、第2回草の根市民運動国際大会出席のため南米3国（エクアドル、ボリビア、パラグアイ）を歴訪、スペイン人による征服の歴史にふれ、先住民の虐殺や奴隷化を謝罪した。“土地・家・職（tierra, techo, trabajo - 3T）を求める排除された者たちの叫びに耳を傾けよ”と訴えた。同年9月、教皇フランシスコの仲介で国交を回復したキューバと米国を訪れ、歓迎を受ける。ラウル・カストロ国家評議会議長とオバマ大統領に交渉を促し、両国間に橋を架けたのだ。翌2016年2月には東方教会最大のロシア正教会のキリル総主教とキューバの首都ハバナで会談。1054年以来の東西キリスト教会の分裂を克服する試みである。その帰途訪れたメキシコではペニャ・ニエト大統領に汚職、麻薬、暴力の深刻さを指摘、米国境に近い“不法”移民の通り道であるシウダ・ファレスでミサを行った。2017年9月、半世紀に及ぶ内戦が終焉したコロンビアで、教皇はその被害者やもとゲリラを招き、国民和解の祈りの集会を開く。

2018年初頭にチリを訪れた教皇を迎えたのは、聖職者による子どもへの性的虐待事件に対する激しい抗議デモと教会爆破事件だった。教皇は謝罪し、チリの司教全員が辞任。こうした性犯罪は欧米諸国や日本でも起きており、カトリック離れを加速させる要因にもなっている。聖職者による性犯罪の主な原因は、カトリック聖職者の独身制にある。ブラジルでは司教団の要請により、結婚によって聖職を離れた元司祭の職務復帰を教皇がこの国で実験的に実施



教皇とラウル・カストロ (AP)



先住民女性からアマゾンの草花を贈られる教皇 (Mensaje, dic)

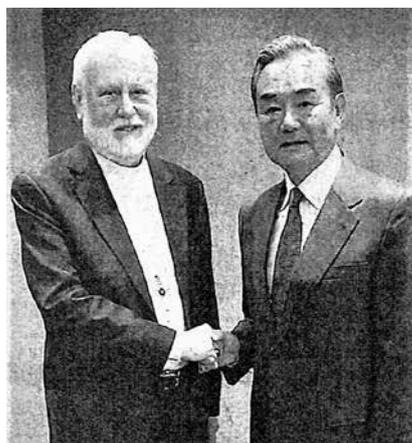
する方向にある。昨年10月、先住民代表を招いて開かれたアマゾン特別シノドス(世界代表司教会議)で、アマゾン周辺の司牧活動強化のため既婚男性の司祭叙階が検討された。会議直前に大規模な森林火災が起きたこともあって、アマゾン農地と鉱山に変えようとするブラジルのボルソナーロ政権(2019年～)への批判も示された。

### 今後の課題 - 福音派の隆盛、中国への接近

ラテンアメリカにプロテスタントが伝来したのは独立以降だが、近年米国から神学的保守派で親イスラエルの福音派やペンテコステ派が到来し、カトリックをしのぐ勢いで伸びている。その背景にはラテンアメリカのキューバ化と「解放の神学」を阻止するため、米国政府の支援を得た布教計画があった。

プロテスタント布教の歩みをたどると、まず第一の波としてヨーロッパから布教団が到来、宗教改革を起源とするバプティスト、メソジストなどの歴史的諸派による布教が開始される。第二の波は19世紀末から20世紀初頭にかけて、米国の膨脹主義的外交政策を背景に自由と民主主義を国境の南(とくに地理的に近い中米諸国)に伝える使命感のもとに、布教が活性化した。中心になったのは聖書の無謬性を信じる福音派(Evangélico)である。ついで布教の第三の波は1930年代以降、これも米国から伝えられたペンテコステ派(Pentecostés)で、60年代から急増している。ペンテコステとはキリスト復活後の50日目(五旬節)の聖霊降臨祭を意味し、教義よりも神との交わりを重視する。カトリックの中からも聖霊を重んずるカリスマ派(Carismático)が台頭し、ペンテコステと協力関係にある。

なかでも米国の布教団の働きかけのもとでプロテ



バチカン外務局長と中国外相会談 (バチカン提供)

スタントが急増したのは、中米のグアテマラである。1982年に福音派の軍人がクーデターで実験を握ると、米国の福音派の指導者たちが訪れて「キリストの王国」とたたえ、カトリックは弾圧された。福音派が支持する米国のトランプ大統領に次いで、2018年にグアテマラが在イスラエル大使館をエルサレムに移転したのは不思議ではない。ブラジルの福音派でもと軍人のボルソナーロ大統領も大使館をエルサレムに移転する予定だったが、アラブ諸国からの移民がふえていること、鶏肉などを大量にアラブ諸国に輸出していることなどから、各界からの反対を受けて断念した。人口の4割をイスラム教徒が占めるアフリカでは、親ユダヤ・イスラエルのペンテコステが社会の不安定要因になっている。三大宗教(ユダヤ教、キリスト教、イスラム教)の聖地であるエルサレムは、国連による国際管理が妥当とする立場をバチカンもとっている。

今年2月、バチカンのギャラガー外務局長(外相)と中国の王毅外相がドイツで会談した。司教任命権をめぐる1951年に両国が断交して以降、初めての外相会談で、新型コロナウイルスに対して中国にマスク70万枚を贈ったバチカンへの謝意も述べられた。「宗教の中国化」をはかる中国政府は、キリスト教の中でも教皇に忠誠を誓うカトリックに対し特に警戒的である。両国は2018年に司教任命権問題で合意し、19年に中国政府公認の聖職者を司教と認めた。現在中国のカトリック教徒はおよそ1,200万人とみられ(非公認の地下教会との合計)、ラテンアメリカなどで信徒が減少している現在、中国のキリスト教徒の存在は無視出来ない。中国は憲法で信教の自由を認めているが、それが信用できないバチカンは台湾と外交関係を維持している。現在台湾と外交関係を持つ15か国のうち、9か国はラテンアメリカの国々である。16世紀にイエズス会のザビエルは中国への布教を志して果たせなかった。21世紀の教皇フランシスコは、徐々に中国との壁を崩しながら接近しようとしている。この姿勢が中国の信徒の人権を損なわないことを願う。

(よつや ひろこ 元帝京大学経済学部教授)

#### <参考文献>

教皇フランシスコ/ドミニク・ヴォルトン(戸口民也訳)『橋をつくるために - 現代世界の諸問題をめぐる対話』新教出版社 2019年

乗 浩子『教皇フランシスコ - 南の世界から』平凡社新書 2019年